

2013年度（平成25年度）第1回河川工作物アドバイザー会議
論点等整理

1 羅臼川砂防ダム改良工事に伴う上下流の産卵環境について

※サケ類を遡上させる目的は達成しているが、砂防ダム上下流の河床には大きな石が多く、産卵床があまり造れない状況である（砂防ダム上流左岸に土砂を寄せて河道整形していることも影響している）。

※土石の流下時の砂防ダム下流魚道隔壁の摩耗破壊の可能性があり、また、平水時のスリット部の水深が低く遡上が難しい可能性がある。

（H25 第1回AP論点）

○モニタリングで今後の推移を見ていくことが必要。

2 グレーダムの今後の取り扱い

全体の取扱い

※グレーダム8河川35基について検討を開始する。

検討の進め方は、以下の方法による。

- ①35基に現時点でのレビューをかけて、改良が適当なダムを選定し優先順位を付ける。
- ②レビューを待たずに、改良が可能な河川について先行的な改良を①と併行して行う。
- ③先行して改良を検討するダムはH25第2回会議で事務局より提示し、レビューは次年度に行う。

※グレーダム改良における対象魚種は、引き続きカラフトマス、シロザケ、サクラマス、オシロコマとする（ただし、主に下流域で産卵するカラフトマス、シロザケと、主に上流域で産卵するサクラマス、オシロコマの特性も踏まえる）。

（H25 第1回AP論点）

○サケ類を遡上させるだけでなく、ダム区間の産卵環境を造ることや、海と陸の相互作用等の生態系としての河川のあり方といった視点が必要。

○最下流のダムで大量のカラフトマスが止められているモセカルベツ川、ケンネベツ川、ショウジ川が、改良の優先度が最も高いのではないか。

○アイダマリ川は、カラフトマスの自然産卵の可能性があり、民間の堰との兼ね合いもあり現状をしっかりと押さえる必要がある。

○クマと人との接触機会を減らすためにも、人家や道道近くでサケ類が滞留しているダムを優先的に改良した方がよい。

3 オショロコマ等の長期モニタリングについて

※第2回APで評価書を完成させ、科学委員会へ提示する。

(H25 第1回AP論点)

- オショロコマ個体数密度に関しては、降海型と残留型に分けた集計をすべき。
- 調査時期においては、オショロコマの0才は本流ではなく、浅い場所（支川）で生活していることが考えられ、本川の1~2箇所为代表的な部分の調査では把握できない可能性がある。
- 河川の水温が一番上がるのは、水表面積が広くてゆっくり流れる場所である。斜里側で水温が上がっているのは、水表面積の大きさ、河川勾配の違い等からダイレクトに解析する方がよいのではないか。
- 調査河川が遺産地域外に多くある。半島全体の広がりを持って調査範囲としたことは理解できるが、先端部のモイレウシ川等も水温調査は行って欲しい。

4 サケ類遡上等に関する長期モニタリングについて

※第2回APで評価書を完成させ、科学委員会へ提示する。

※ルシャ川の第1ダム下流の河床は低下してきている。

※ルシャ川のカラフトマス産卵床数は、平成20年以前と平成24年では大きな差があるが、産卵床カウント方法等に違いがないか確認が必要。また、平成24年はヒグマの捕食時期が遅れていたことから、産卵床数のピーク時期と重なり数を減らした可能性もある。

5 その他

※シロザケ、カラフトマス、サクラマスは「サケ類」と表記する。

オショロコマやアメマス（イワナ属）を加えた場合は「サケ科魚類」と表記する。

※グレーダムについて、理解しやすい名称とする。

※ケンネベツ川で、昭和40年の台風23、24号の集中豪雨の際に起こった甚大な被害の内容を調べる。